

# 社会科

新谷 和幸・中丸 敏至・伊藤公一・迫 眞也

## I. はじめに

東雲小・中（以下、本校）社会科部では、昨年度から『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を培う教育の創造」というテーマの基、子どもたちの協働的問題解決を視野に入れながら研究を行っている。グローバル時代における社会問題は、既存科学の範疇だけで解決できない場合が多い。そのため、現在トランスサイエンスの観点を踏まえ、様々な立場から子どもに育むべき資質・能力が提言され、それらを効果的に育むための方法的研究も盛んに行われている。社会科が地理学や歴史学、経済学などの社会諸科学の成果を踏まえた教科であることを考えると、社会科学という領域の中ではあるが、ある意味トランス的な要素を踏まえた教科（学問）と言えよう。このような社会科の教科の特性を生かしつつ、本研究ではこれまでの成果や本校の実態を基に、グローバル時代をきりひらく汎用的な資質・能力を設定するとともに、既存の教科・領域の枠組の中で系統的に育むための授業のあり方を検討していく。

内容教科である社会科は、子どもの社会認識を通して公民的資質を育成する教科である。つまり、社会の見方となる一般性のある知識・概念（内容知）の獲得を通して、資質・能力（方法知）を育む。そのため、社会科ではグローバル時代をきりひらく資質・能力を吟味・検討する上で、児童の社会認識形成を切り離すことはできない。能力ベースの方法論に特化した研究は、「這い回る社会科」や道徳の範疇に留まる可能性がある。また、グローバル時代における社会問題を解決する上で、子どもたちが将来トランスサイエンス的な見方・考え方による協働的な市民的行動を芽生えさせるためには、まずはその種蒔きとして、義務教育段階での社会科固有の認識や資質・能力を育成しておくことも必要と考える。

そこで、本校社会科では、『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を育成する授業のあり方」を探る上で、以下の2点を基に検討することにした。

- ①グローバル時代をきりひらく資質・能力を、社会科で育む公民的資質や学力を踏まえ検討する。
- ②グローバル時代をきりひらく資質・能力を育成する授業づくりとして、子どもの発達段階を踏まえ、内容面と方法面の双方向で検討する。

## II. グローバル時代をきりひらく資質・能力と社会科で育む資質や学力との関連性

本校では、グローバル時代をきりひらく資質・能力（以下、グローバルな資質・能力）を「様々な文化や価値観を理解し認め合いながら自分の考えを明確にして問題解決する力」と定義した。これは本校9年間の教育課程でめざす子ども像「共生社会をたくましく生き抜く人間力豊かな人間エリート」の実現に必要な「①多様性」「②主体性」「③協働性」の3つの観点と対応している（表1）。

他方、社会科では、「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」ことが教科の目標として挙げられている。この公民的資質であるが、これまで社会認識との関連や社会形成者のとらえ方の違いから、様々な内容が検討がされているものの、明確な定義はない。時代によって社会が変化することを考慮すれば、むしろ具体的且つ明確に定義できないものとも言える。

ちなみに、平成20年度版小学校学習指導要領解説では、公民的資質について、部分的ではあるがその内容を示している。この内容を分析すると、①社会の形成者としての自覚、②自他の人格を互いに尊重し合う点、③社会的義務や責任感、④多面的な思考、⑤公正的な判断、⑥主体的な社会参画、が示され、先の3観点を踏まえた内容であることがわかる。ここには、国際社会や持続可能な社会を意識した文言もあり、地域市民、日本国民としての「公民」を軸としながらも、地球市民という観点を踏まえた資質

表1. グローバル時代をきりひらく資質・能力

【グローバル時代をきりひらく資質・能力】	【めざす子ども像を育む力】	【社会科における評価の観点】
①様々な文化や価値観を理解し認め合いながら ②自分の考えを明確にして、 ③問題解決する力	「多様性」 「主体性」 「協働性」	「関心・意欲・態度」 「思考・判断・表現」 「資料活用・観察」 「知識・理解」

育成の必要性も窺われる。このことから、社会科の目標に示す公民的資質には、既にグローバルな資質・能力が包含されていることがわかる。

また、日々の社会科授業で育む学力からグローバルな資質・能力を考えると、それを育むには「関心・意欲・態度」、「思考力・判断力・表現力」、「資料活用力・観察力」、「知識・理解」のいずれの学力も必要不可欠と言えよう。例えば、「様々な文化や価値観を理解し認め合う」には、世の中にどんな文化や価値観があるのか、「関心」をもって「資料活用・観察」しながら「意欲」的に調べる必要がある。また、それらがどのようにして形成されたのか、「思考・判断」し「知識」として獲得する必要もある。さらに互いの文化や価値観を認め合うには、獲得した知識を基に自他の立場を踏まえ言葉を選び「表現」し、互いの文化や価値観を「理解」し認める「態度」も必要だからである。

このように、社会科は「社会を学ぶ教科」であり、「未来社会の形成者としての公民的資質を育む教科」であるが故、既に授業を通してグローバル時代な資質・能力を育む基盤はできている。今後社会科において、グローバルな資質・能力をこれまで以上に育んでいくためには、その必要性を子どもが実感できるような授業に関する内容面の検討と、それを生かすための方法面の検討が必要と言えよう。

### Ⅲ. 子どものグローバルな資質・能力を育むための社会科授業基盤

#### 1 「教育内容の論理」と「子どもの心理」を結びつける問題解決的な授業づくり

社会科授業を通してグローバルな資質・能力を育むには、内容教科としての社会科の特性や社会科で育む資質や学力との関連性を考えた場合、やはりこれまで同様、問題解決的な学習が基本と言えよう。なぜならこの学習は、子どもの課題解決における主体的な探究活動を通して、社会の見方となる知識・概念を効率的に獲得させる上で、有効な学習形態だからである。これは、子どもの「社会認識形成」を通して「公民的資質の育成」をめざす社会科の本質を踏まえ、本校社会科部が「教育内容の論理『に』子どもの心理を結びつけた授業づくり」を継続して行ってきたことと関連する。

しかし、今まで以上子どものグローバルな資質・能力を育むには、本校社会科部の問題解決的な学習における考え方を見つめ直す必要がある。そこで、学びの主体である「子どもの」、「子どもによる」学びを育められるよう、本校社会科部では「教育内容の論理『と』子どもの心理を結びつける問題解決的な社会科授業づくり」をめざす。そのためには、課題把握、課題追究、課題解決といった一連の学習過程を通じて、どれだけ子どもの主体性を維持しながら授業展開することができるかが鍵となろう。

これまで通り、「子どものための」学びとなる社会の見方としての教育内容を育む上で、知識の構造や問いの構造を行う一方、その中に児童の素朴な問いや疑問を関連づけたり、今まで以上に児童の心理に沿った弾力的な学習過程、授業展開を行ったりすることが必要となろう。

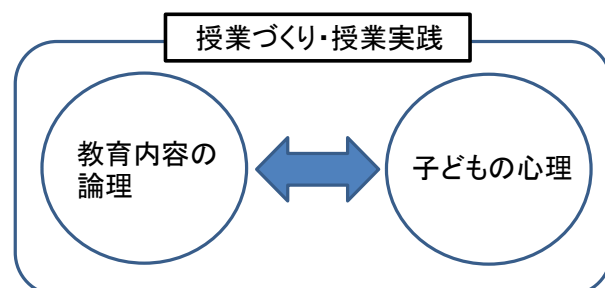


図1. グローバルな資質・能力を育む授業基盤

#### 2 子どもがグローバル化する社会をとらえるための枠組み

次に、今日のグローバル時代を踏まえどのような社会を対象にして、子どもの社会認識形成を図る必要があるのか。社会のグローバル化をとらえる新たな初等社会科授業開発をめざした広島大学・附属小3校の共同研究の成果を踏まえ検討した。

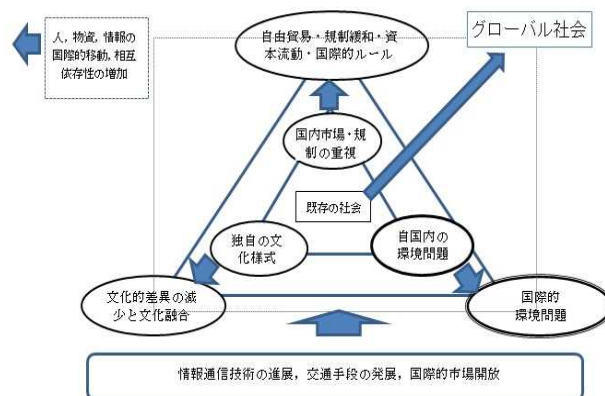
ここでは、先行文献を基に、現代のグローバル化を「情報通信技術の進展、交通手段の発展、国際的市場開放を起因として、人、物資、情報の国際的移動、相互依存性が活性化していき、経済面・文化面・環境面に対する社会問題を生じさせる現象」としてとらえ、児童の発達段階を考慮し、既存社会の観点からグローバル化によって社会問題が発生するメカニズムについて検討を行っている。

ここでの既存社会は、児童が所属する国レベルの範疇の社会を想定している。そこでは、自国の社会の維持・発展のために、経済や文化、環境面で様々な取り組みが行われ、問題が発生した場合でも各領域の取り組みを調整しながら自国の範疇で対策を行い、解決していくためのシステムが社会の中に構成されている。これまでの社会科では、それらを教育内容として獲得することで、子どもの社会認識形成を行ってきたと言えよう。しかし、近年、情報化や物流の発展などの社会変化によって、自国の範疇を

超えたところから要因がもたらされるようになり、国内問題といっても、国内だけで解決することができない構造となっている。それらの内容を踏まえ、既存社会の観点からグローバル化する社会構造として示したのが、図2である。

本研究では、これを「グローバル化する社会をとらえるための枠組み」として設定し、社会認識形成の基盤に据えることで、子どもの社会の見方・考え方を育むことにした。

それでは、どのような社会の見方・考え方を子どもに育めば、グローバル時代における社会の様子や変化、問題などを、児童が社会形成者として主体的にとらえ、解決・判断できるようになるのだろうか。



新谷和幸・中丸敏至・松岡靖・沖西啓子・伊藤公一・木村博一・永田忠道（2014）「グローバル社会に対応した国家・社会の構造を認識する 社会科授業開発-附属小学校3校の共同研究の成果として-」、『広島大学学部・附属共同研究紀要』第42号，p58.

図2. 現代のグローバル化をとらえる社会の枠組み

### 3 グローバル時代における社会の見方・考え方

グローバル時代の社会問題が生じる背景には、情報化や物流の発展だけでなく、既存社会における社会システムの認識を通して、自国の経済や文化、環境を中心にとらえてきた人々の見方・考え方も大きい。今後、さらなるグローバル化の進展を考えると、私たちの所属する既存社会だけでなく、世界規模の範疇で社会をとらえる見方・考え方も重要となってくる。しかし、地球温暖化などグローバル化に伴う社会問題は、様々な社会要因が複雑に絡み合っており、世界中の地域や国の実情を認識していなければ考えることすらできない。このような社会の見方・考え方を授業で直接児童育むことは、子どもの発達段階を考慮した場合、中等社会科はともかく、初等社会科では難しいと言える。

先のグローバル化する社会の様相や社会問題が顕在化する仕組み、7年間の社会科の系統性などを考慮すると、社会科では様々な範疇の社会を区別して個々にとらえるのではなく、むしろ、既存社会の観点から空間軸を活用し、それらを関連させながらグローバル時代に即した社会の見方・考え方をとらえ、子どもに育むことが必要と言える。

#### (1) グローバル時代における社会の見方

哲学者の内山は、近代の民主主義国家と昔の農村や職人の世界の比較を通して、民主主義とは「小さな規模でしか機能しない仕組み」と指摘している。社会の範疇が広がるほど人々の結び合いは不明瞭になり、民主主義という欠陥のある制度を顕在化させているとした。これからの社会科ではグローバル化する社会の様相を通して、民主主義社会の構造やそのよさだけでなく、難しさや欠点も含み込んで学ぶ必要があろう。既存の小さな社会から子どもに民主主義社会の一員としての資質を育みながら、グローバル時代における社会問題を通して、大きな社会における民主主義のほころびや影響をとらえていく。これを可能とする社会諸科学の成果を「基盤」とした教育内容を「グローバル時代における社会の見方」として形成していくことが必要となる。また内山は、主権は「人々の結び合いや関係性の中にある」とし、そのつながりによって共同体をつくり広げることが国家などを相対化し多様で多層な共同体の存在を可能にする、とも述べている。高度情報化によって今日、人々のつながる機会は格段に増えた。既存社会の枠を超えて人々が主体的につながっている。しかしその一方で、反国家的な人々が武力集団を形成し、国家を超えて支配している現状もある。今後社会科では、「グローバル時代における社会の見方」を育む上で、「人々がつながる価値」をとらえていくことも重要となるであろう。社会は人々の志と縁（つながり）によって形成されている。この点を大事にできるように配慮したい。

以上の点から、「グローバル時代における社会の見方」を育むためには、教育内容として社会空間の関連性や人々の関係性を含み込んだ、知識や概念を設定する必要がある。

次に、社会科でこそ育むべきグローバル化に対応した資質・能力として、環境学者である阿部の見解を踏まえ、検討していく。阿部は、現代の社会問題の解決を図る上で、人々の共有可能な価値としての「つながり（関係価値）」に着目し、今後人々がつながりを通して様々な可能性から最適なものを選び取っていく「価値判断」のあり方が重要とした。これまで社会科では、価値判断能力を社会の考え方としてとらえ、未来の社会を形成する子どもに育むべき資質としてきた。ここでは、合理的な解決が困難な問題に対して、適切な社会行為を選択していく「個の価値判断」と言える。

その一方で阿部は、協働的な価値判断における「知の統合」について、一人一人の研究者の中でしか実現できないものとし、結果が共有されることはあっても、統合への過程は個人の頭の中でしかない、とも述べている。つまり、集団での協働的な価値判断の基盤は、やはり個人であり、「個の価値判断」を育成がまずは必要不可欠と言える。可視化される集団での協同的な活動は確かに大事ではあるが、それを通して児童個々の可視化できない思考を活性化していくことにこそ、意味がある。

以上の点から、社会科でこそ育むべきグローバル化に対応した資質・能力として、これら2つの価値判断を「グローバル化する社会の考え方」とし、授業構成する必要があるだろう。

## 1 グローバル時代における社会の見方・考え方を育む授業開発の視点と系統性

初等社会科の学習内容を基盤とする中等社会科の段階では、既に各空間レベルでの社会の見方が備わっていると言える。それ故、発達の最終段階である中等社会科では、地理・歴史・公民といった分野ご



- 4 -



との学習を通して、これまで育んだ社会の見方・考え方を深化・拡大させるとともに、どの空間レベルでも適用可能な客観的で多面的な社会の見方・考え方の育成をめざす。

ちなみに、社会の見方となる教育内容は、社会諸科学の成果に基づくグローバル時代の社会に必要な知識（理論）や概念（命題）となる。当然、グローバル化に直接関連する最新理論ばかりでなく、これまで子どもの社会認識形成で用いられてきた科学的知識や概念も含まれる。

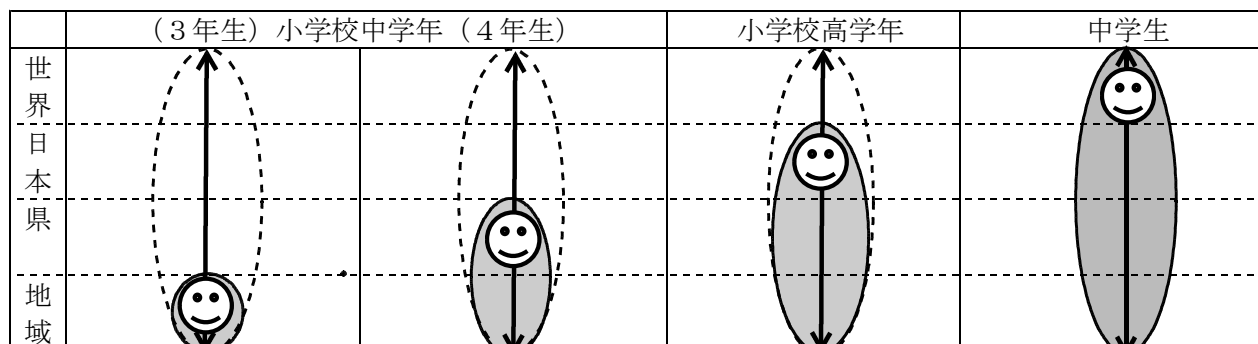


図4. グローバル時代における社会の見方を育むための発達段階に応じた入り口や社会の範疇

## 2 子どものグローバルな資質・能力を育む授業開発の観点

ここでは、問題解決的な学習によるグローバル時代における社会の見方・考え方を通して、子どものグローバルな資質・能力を育むための授業開発の観点について、以下に示す（表2）。これらの観点を踏まえながら、教材開発や単元構成し、授業実践を行う。

表2. 子どものグローバルな資質・能力を育むための授業開発の観点

	項目	観点
教材研究	学習材の開発	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの実態（発達段階、興味・関心）に即した学習材</li> <li>・子どもの既有知識や経験知を活用できる学習材</li> <li>・社会状況、社会問題や社会変化に関連し、子どもが社会（教育内容）をとらえやすく追究可能な学習材</li> <li>・子どもの既成概念を揺さぶる驚き・発見・切実性のある学習材</li> <li>・子どもが社会の一員としての意識や自覚を育める学習材</li> </ul>
	課題把握	<p>【グローバル時代における社会の見方・考え方の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育内容としての社会の見方を育む課題</li> <li>・社会のグローバル化やグローバルな社会問題に関連する課題</li> </ul> <p>【グローバルな資質・能力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが関心をもって学びを追究したり、活発に意見交流したくなる課題（主体性・協働性）</li> <li>・子どもの驚きや切実感を伴う課題（主体性）</li> <li>・子どもが既有知識や経験、単元を貫く学習課題に至るまでの学習を通して、課題に気づける内容の設定（主体性）</li> <li>・複数の視点から多面的に迫ることのできる課題（多様性・協働性）。</li> </ul>
単元構成	課題追究・解決	<p>【グローバル時代における社会の見方・考え方の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習する社会範疇での課題追究、課題に対応した社会の見方の獲得</li> <li>・より広い社会範疇での社会の見方の適用</li> <li>・より身近な社会範疇での社会の見方の適用</li> <li>・獲得した社会の見方の有用性・必要性の実感、価値判断</li> </ul> <p>【グローバルな資質・能力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの学習材や課題に対する興味・関心を高めたり、活発な意見交流を促したりすることができる具体物の提示（主体性・協働性）</li> <li>・子どもの様々な意見の喚起し実感が伴う学習活動（主体性・多様性）</li> <li>・様々な学習形態による課題追究活動（多様性・主体性・協働性）</li> <li>・子どもの素朴な考えも含み込んだ弾力的な課題追究（主体性・多様性）</li> </ul>
	その他	<p>【グローバル時代における見方・考え方の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・社会範疇（地域・国・世界）相互の関連性についての認識</li> </ul> <p>【グローバルな資質・能力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グローバル時代における社会問題や社会論争問題、未来社会や持続可能な社会形成に関する話し合い活動（主体性・多様性・協働性）</li> </ul>

### 3 子どものグローバルな資質・能力を育む学習形態

社会科授業を通して子どものグローバルな資質・能力を育むには、先に示すように、児童の社会認識を通した問題解決的な授業づくり（教材研究・単元構成）が不可欠である。その社会科授業づくりの基本構造の中で、さらに課題追究を通して子ども同士が互いに学びあう学習活動や学習方法を組み込めば、子どもの多様性・主体性・協働性は、より有効に育むことが可能となるであろう。

子ども同士が互いに学びあう学習を行うには、子どもの発達段階を考慮して、以下のような量的・質的な観点から検討する必要がある。

量的な観点：ペア、班別、グループ別・課題別、クラス単位、など  
質的な観点：バズ学習、ディベート、ジグソー法、劇化、ICT活用、ウェビング法、複線型学習法など

一般的に発達段階が上がれば、子どもの社会認識や客観的・論理的な思考も深まる。それ故、子ども同士が学びあう活動を取り入れる場合、学年に応じた量的・質的な学習形態・学習方法を導入する。

例えば、社会科導入期の小学3年生の場合、児童の知識・経験も少なく、なかなか全体の中で個の発言を生かすににくい。ここでは、身近で気心知れた隣の児童とのペアで話し合ったり、バズ学習を生かした班単位での討議を行ったりする、少人数での学びあいがある有効であろう。

他方、中学生の場合、小学生と比べ個々の社会認識も高く、論理的な思考もできる。学習内容を生かしたクラス全体での話合いやグローバルな社会問題に関するディベートが有効であろう。また、様々な学習形態・学習方法を子ども自身が考えて、課題追究することも可能であろう。特にICTの活用や知識構成型ジグソー法による学習は、社会認識形成を柱とする社会科において、子ども自体に社会認識がある程度備わり、多面的な見方やICT機器操作方法が育まれていなければ難しい。

社会科授業を通してグローバル時代における社会の見方・考え方の基盤が整う中学生段階で、最終的に子どもが様々な集団形態で質的に高い話し合い（コミュニケーション）や建設的な学びあい（コラボレーション）を行い、グローバル時代における社会問題や社会論争問題に対する意思決定、さらには子どもなりの知の創造（イノベーション）行うことができるようにしたい。

しかし、学習形態や活動は、あくまでも手段であり目的ではない。有効にグローバルな資質・能力を育むためには、社会科として社会認識の形成を大事にしたい。

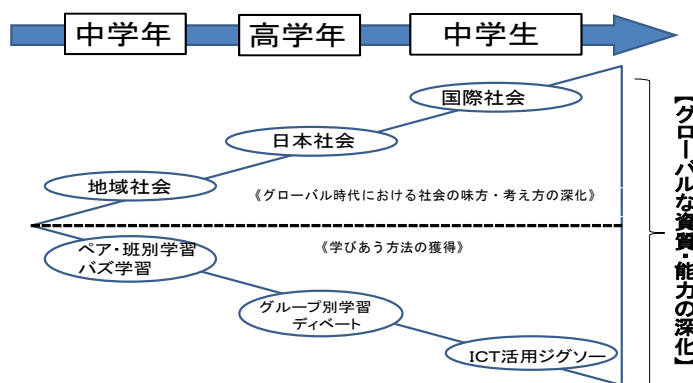


図5. グローバルな資質・能力を育む手立て

## V. 本年度の研究計画

### 1 研究の目的

「グローバル時代をきりひらく資質・能力」につなげる社会の見方・考え方を育むための授業開発Ⅱ

### 2 研究の方法

- (1) 本校が定義する「グローバル時代をきりひらく資質・能力」と社会科における公民的資質や学力との関連性について、これまで挙げられている教科を横断する汎用的な学力の特徴や社会科の目標・学力の変遷に関する文献を基に分析し、検討する。
- (2) 子どもの社会認識から公民的資質を育む社会科の本質を踏まえながら、「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育むための社会の見方・考え方や授業づくりのあり方を検討する。
- (3) 上記の検討を踏まえ、「グローバル時代をきりひらく資質・能力」につなげる社会の見方・考え方を育むための授業開発・実践を行う。

## 【参考文献】

- 阿部健一(2009)「地産地消から知産知消へーつながりという『関係価値』ー」窪田順平編『モノの越境と地球環境問題』昭和堂.
- 阿部健一(2012)『生物多様性ー子どもたちにどう伝えるか』昭和堂.
- 阿部健一(2013)「価値を問うー『関係価値』試論」立本成文編『人間科学としての地球環境学』第2章, 京都通信社.
- 岩田一彦 (1994)『社会科授業研究の理論』明治図書.
- 内山節(2005)『「里」という思想』新潮選書.
- 内山節(2012)『内山節のローカリズム原論ー新しい共同体をデザインするー』農文協.
- 内山節(2014)『主権はどこにあるかー変革の時代と「我らが世界」の共創』農文協.
- 木村博一 (2002)「初等社会科教育学の構想」『初等社会科教育学』協同出版.
- 木村博一 (2006)「新しい学びにもとづく社会科授業開発の基礎基本」社会認識教育学会編『社会認識教育の構造改革-ニュー・パースペクティブにもとづく授業開発ー』明治図書.
- 木村博一(2015)「社会の見方や考え方を育てる社会科」日本教科教育学会編『今なぜ、教科教育なのかー教科の本質を踏まえた授業づくりー』文溪堂.
- 新谷和幸・中丸敏至・松岡靖・沖西啓子・伊藤公一・木村博一・永田忠道 (2014)「グローバル社会に対応した国家・社会の構造を認識する社会科授業開発ー附属小学校3校の共同研究の成果としてー」,『広島大学学部・附属共同研究紀要』第42号, pp. 57-66.
- 新谷和幸・中丸敏至・伊藤公一・服部太・沖西啓子・木村博一・永田忠道 (2015)「文化に焦点化した『グローバル社会学習』の授業開発ー附属小学校3校の連携を生かしてー」『広島大学学部・附属共同研究紀要』第43号, pp. 153-162.
- 新谷和幸 (2015)「グローバル化する社会をとらえ児童に公民的資質を育む授業とは」第64回全国社会科教育学会全国研究大会課題研究Ⅰ(3)発表資料.
- 新谷和幸・中丸敏至・伊藤公一・服部太・沖西啓子・木村博一・永田忠道 (2016)「グローバル化する環境問題に焦点を当てた「グローバル社会学習」の研究ー附属小学校3校の連携を生かしてー」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第44号, pp. 159-168.